

1 花きの生産現状と新資材等の研究の取り組み

1 生産の現状

京阪神の大消費地をひかえた兵庫県では、瀬戸内海から但馬の準高冷地までの変化に富んだ気象条件を生かし、切り花、鉢花、花木、球根等多くの種類が年間を通じて栽培されている。

生産量の多いものは、花壇苗物が全国第3位、切り花カーネーションが全国第4位で、ストックが第5位、チューリップが第6位である。

また、神戸市北区淡河町のシンテツポウユリはブランド品目として全国的にも評価は高い。

2 花き栽培の課題

生産者の高齢化と婦人化が進行しており、いままで以上に省力を加味した高品質生産に取り組む必要がある。また、生産環境の社会問題として、環境汚染、廃プラスチックの問題などがある。

昨年、ジャパンフローラ2000が開催され、これを契機に花への関心が高まり新たな需要が期待できる。

3 新資材の研究の取り組みと今後の方向

これまでで取り組んだもののうち機械化対応、増収効果、生産環境対応技術の事例を紹介する。

根鉢形成が悪い品目の機械移植に適したセル成型苗では、用土を固化する必要があり固化技術を開発した。しかし、従来の地床苗に比べて断根がないため、生育、開花が前進する傾向にあり、セル成型苗に適した栽培技術を開発する必要がある。

花壇苗のわい化剤利用技術は、現地からの要望が最も多い課題であるが、最大の問題点は農薬登録である。これについては農薬メーカーへ依頼していきたい。

光反射マルチは、夏季の地温抑制や冬季の光合成促進効果があり、バラ栽培において切り花本数の増加が認められている。

栽培施設の被覆資材としてポリオレフィン系フィルムは、軽くて扱いやすく、塩化ビニルに比べて長期間展張できる利点があり、廃プラスチックの排出量が減少できる。その反面、伸びが少ないため風の影響を受けやすくハウスの骨組みの補強が必要である。さらに保温性、流動性も課題であり、生育への影響、耐候性の検討を行っている。

大西 忠男 (中央農技・園芸部)